

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第205号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2021年9月21日

ジュウイチ



2021. 6.12 野幌森林公園

撮影者 田中克憲 (札幌市白石区)



も く じ

日本初！シマクイナの繁殖を勇払原野で確認
北海道大学大学院地球環境科学研究院 先崎 理之 …………… 2

希少ガン類のカリガネ 本格的な研究スタート
雁の里親友の会 池内 俊雄 山階鳥類研究所 澤 祐介 …………… 4

北海道2例目 ハシブトオオヨシキリ 標識放鳥の記録
根室市 青木 則幸 …………… 7

ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 活動は地域に根ざして
ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 獣医師 山田 智子 …………… 8

私の探鳥地 帯廣神社 鎮守の森と川の小宇宙 野鳥82種の記録
帯廣神社宮司 大野 清徳 …………… 10

野鳥情報コーナー
野幌森林公園で初のシロハラホオジロ
札幌市中央区 田守 真一 …………… 12

ブッポウソウを札幌市内で観察 札幌市清田区 蔵谷ひろ代
積丹半島 キガシラセキレイの観察
酪農学園大学 小林 和楽 坂井 柊紀 …………… 13

千歳市 木村 耕
稚内・大沼にヘラサギ飛来 名寄市 大和田将史 網走市 工藤 茜
探鳥会ほうこく …………… 14

表紙の鳥 ジュウイチ 札幌市白石区 田中 克憲 …………… 15

探鳥会あんない 鳥民だより …………… 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

日本初！シマクイナの繁殖を勇払原野で確認

北海道大学大学院地球環境科学研究院 先崎 理之

皆さんはシマクイナという鳥をご存じでしょうか。名前を知ってはいても見たことのある方は少ないかもしれません。

今回、私たちの研究チームによって、そのシマクイナの繁殖が国内で初めて確認され、論文掲載されましたので、その内容を裏話も含めて報告します。



写真1. シマクイナが生息する勇払原野の湿地

<シマクイナってどんな鳥？>

まずはシマクイナについて簡単に紹介しましょう。本種は極東に分布する全長13cmの世界最小のクイナ科鳥類です。成鳥は全身茶褐色で、白い横斑が交じります。生

態は謎に包まれています。湿地からめったに姿を現さないこと、人目に触れてもネズミのように走り去ってしまうことなどがマニアの間では囁かれていました。

<日本で繁殖している？>

そんなシマクイナですが、これまで日本には冬鳥として希に渡来するに過ぎないと考えられてきました。実際、古い文献上の本種の記録は秋から冬に集中しています。

しかし、2003年の夏季に青森県仏沼で複数のシマクイナが観察され、夜間に「クル・クル」や「クル・クル・ガー」と鳴くことが判明して以降、北日本の複数湿地で夏季の本種の確認が相次いできました。こうしたことから本種の日本での繁殖が現実視されていました。

<共同プロジェクトで難しい繁殖確認に挑戦>

それにもかかわらず、その決定的証拠は押さえられてきませんでした。何しろ世界的にも本種の巣は1906年のロシア沿海地方での発見以降見つかっておらず、雖に至っては誰も目にしたことがなかったのですから、やすやすと繁殖が確認されるはずがありません。しかし、こうした事実はかえって私たちの闘志に火をつけました。

2017年の鳥学会大会時に同じくシマクイナの繁殖確認を目論んでいたNPO法人おおせっからんどの高橋雅雄さん、釧路市立博物館の貞國利夫さんらと打ち合わせを行

い、2018年からシマクイナの繁殖確認に向けた共同プロジェクトを始動することになりました。

<自動撮影カメラとラインセンサスで勇払原野を調査>

このプロジェクトは、夏季にシマクイナが確認された湿地を徹底的に調べて、繁殖の証拠を掴むというものです。私の担当は苫小牧市などに広がる勇払原野のとある湿地です(写真1)。この湿地では2012年に日本野鳥の会によってシマクイナが確認され、私も2013年以降にシマクイナを観察してきました。

調査手法としては、湿地に自動撮影カメラを設置して繁殖の決め手となる子連れの撮影を狙うというものと、夜間に湿地内の固定ルートを歩いて繁殖の兆候を見聞きするというラインセンサス法を併用しました。

2018年5月、付近で修士論文調査をしていた北海道大学農学院の北沢宗大さんを巻き込んで勇払原野での調査を開始しました。

<ラインセンサスで「チヨ」という雛の声を確認>

自動撮影カメラ調査は困難を極め、期待通りの結果が得られませんでした。カメラが揺れ動く草を誤撮影してしまったためです。

一方、ラインセンサス調査は可能性を感じさせるものでした。というのも7月下旬から成鳥1~2羽が複数個所で継続して確認され始めたからです(写真2)。



写真2. シマクイナの成鳥 2018.8.13

8月13日、北沢さんと湿地を歩いていると、真つ暗闇の地面から「チヨ」という小鳥のような声が聞こえてきました。真横からは「キュルル」というシマクイナ成鳥の警戒声と「グアー」というかすれ声も聞こえます。成鳥は一カ所から動きませんが、「チヨ」の声の主は複数おり、「グアー」という声のほうに移動しているのがわかりました。

「チヨ」と「グアー」という声は聞いたことがありませんでしたが、状況を冷静に判断すると「チヨ」はシマクイナの雛の声で、「グアー」という声はシマクイナ成

鳥の雛を呼び寄せる声だと推察できました。一方で、まだ巢内雛がいる可能性も考えられました。そこで、この日の観察はここで中断し、雛の撮影はあらためて臨むことにしました。

<ついに雛を観察・撮影>

そして迎えた8月18日、ついにその時が来ました。日没後にポイントにつくと複数個所から「チヨ」という声が聞こえてきます。完全に巢立ったようです。慎重に目視と撮影を試みます。すると黒い綿羽に覆われた小さな雛を最低6羽確認でき、撮影にも成功しました(写真3)。

観察された雛は、大きさ、脚・嘴の色と太さ、鳴き声などから同所に生息するクイナとヒメクイナではなくシマクイナであると考えられました。シマクイナの繁殖の証拠を掴むことに成功した瞬間でした。



写真3. 撮影に成功したシマクイナの雛 2018.8.18

<シマクイナの研究のこれから>

以上が2018年の勇払原野におけるシマクイナの繁殖確認にまつわる一部始終です。さらに、この調査の後に驚きの事実も判明しました。なんと2004年に仏沼で保護され種不明とされたクイナ類の雛がシマクイナの特徴に一致したのです!

このことから本種は仏沼でも繁殖していたと考えられます。ずっと繁殖の証拠に欠けていた本種ですが、これらの記録は本種が北日本では夏鳥であることを示しています。一方、今回の発見では本種の生態の一端がわかったに過ぎません。私たちは本種の国内生息数や大陸個体群との関係の解明を進めています。順次発表予定です。今後の結果にもご期待ください。

シマクイナの繁殖を報告した論文

Senzaki M, Kitazawa M, Sadakuni T, Takahashi M. 2020. Breeding evidence of the vulnerable Swinhoe's Rail (*Coturnicops exquisitus*) in Japan. *The Wilson Journal of Ornithology* 132:711-717.

世界的に減少も、日本の越冬個体数が増加

希少ガン類のカリガネ 本格的な研究スタート

雁の里親友の会 池内俊雄 山階鳥類研究所 澤 祐介

日本で越冬する代表的なガンとして、ヒシクイ、マガン、コクガンの3種がいましたが、近年は復元計画の成果もあって、ハクガンやシジュウカラガンも普通に見られる鳥となりました。それ以外に、ここ10年ぐらいの間に増えてきたのがカリガネで、2019年には300羽を超えました。中国湖南省の東洞庭湖での個体数の減少と、何らかの関係があるのかもしれませんが。

カリガネとマガンの違い(図1)については、江戸時代の後半に活躍した若年寄の堀田正敦が著した鳥類の図譜『観文禽譜』に、カリガネについての確かな説明があります。マガンより小さく目の縁が黄色いこと、嘴と足が淡紅色で嘴の基部には白い部分がある点など、形態的な特徴をよくとらえています。また、マガンとは混群にはならず、秋には少なく春の北帰の時期に多く見られるなどの、マガンとは生態的にも異なる点を挙げています。しかし、江戸時代の正史である『徳川実紀』の中の将軍の狩猟記録には、獲物としてカリガネの名前は登場しません。いわゆる江戸期の博物学サロンの中心を担った堀田正敦のところには、ガン類に関する詳細な情報が寄せられたのだと考えられます。万葉集などに登場する「カリガネ」が種ではなく「雁ヶ音(雁類の鳴き声)」を意味していたように、一般的にはカリガネが独立した種だと認識されていなかった可能性が高いと思われます。

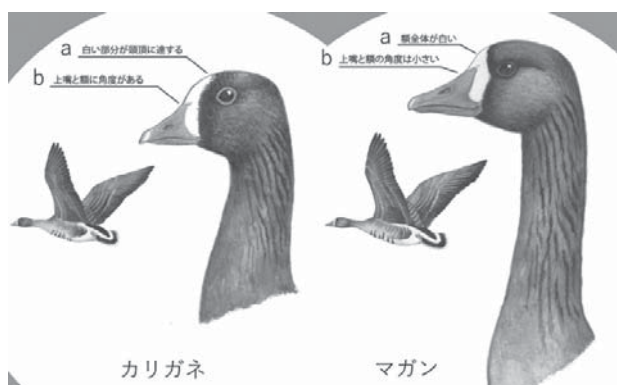


図1. カリガネとマガンの識別点 (Lesser White-fronted Goose ID Cardより。イラスト:川崎里実)

<300羽超、増えている日本のカリガネ>

それでは、現在のカリガネの調査研究について、紹介していきます。国内におけるカリガネは、主に、中継地であるサロベツ、越冬地の宮城県および鳥根県に飛来します。サロベツでは、2001-2004年の間は数個体が秋の渡り時期に通過するのみでしたが、2005-2007年には40羽以上の群れが観察されています。マガンの一大越冬地である伊豆沼・内沼、燕栗沼周辺でも、2000年代に入っ

てからカリガネが増えだしています。雁の里親友の会(脚注1)で定期的・継続的に越冬数を把握するようになったのは2012年からで、個体数の変化は図2に示した通りです。50羽以下だったものが、2019年の冬には300羽以上になりました。また、鳥根県の斐伊川河口部においても少数ながら毎年カリガネが越冬しています。多くなったとはいえ、20万羽ものマガンに比べると少ない越冬数です。

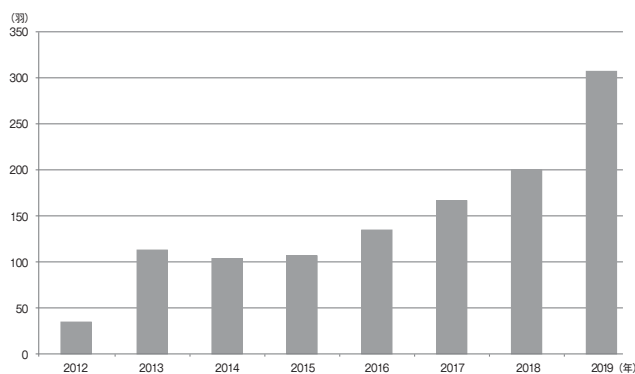


図2. 宮城県におけるカリガネの越冬個体数の推移 (雁の里親友の会)

<世界に3つのカリガネ地域個体群>

日本では増えているカリガネですが、世界の状況はどうなっているのでしょうか。カリガネは、スカンジナビア半島からユーラシア大陸の東端まで広く分布しており、繁殖域と渡り経路によって、図3のように3つの地域個体群(スカンジナビア個体群、西側主要個体群、東側主要個体群)に分けられています。全世界での個体数は、24,000~40,000羽と推定されており、IUCNのレッドリストでは、危急種(Vulnerable)に指定されています。



図3. カリガネ個体群の分布と推定個体数

スカンジナビア個体群は、スカンジナビア半島、フィンランド、ロシアのコラ半島で繁殖する個体群で、冬季

には、フィンランド、エストニア、ポーランド、ハンガリーなどを經由してギリシャで越冬します。この個体群は、20世紀初めには10,000羽と推定されていましたが、減少を続け、2004年には20～30ペアにまで減少しました。原因は、繁殖地でのトナカイの放牧による生息地の劣化、キツネによる捕食圧の増加、渡りルート上での違法狩猟などです。現在は、これらの脅威に対する取り組みが行われ、100～120羽ほどに回復しています。

西側主要個体群は、ロシア北部のツンドラ地帯からタイミール半島中部にかけて繁殖する個体群です。秋の渡り時期にはオビ川に沿ってカザフスタン北部を經由し、アゼルバイジャン、イラクなどで越冬します。個体数は、10,000から30,000羽と推定されていますが、渡りルート上で行われる狩猟が大きな脅威となっています。カリガネは保護鳥になっていますが、マガンと混獲されることにより、多くのカリガネが犠牲になっています。また、アゼルバイジャンやイラクなどでは、ダムの建設や河川管理による生息地の劣化も脅威となっているようです。

東側主要個体群は、タイミール半島からチュコト半島にかけて繁殖し、中国、日本で越冬する個体群で、中国の東洞庭湖が最も大きな越冬地となっています。1980年代後半から1990年代前半には、中国の安徽省、江西省、江蘇省などを中心に60,000～70,000羽が生息していたと推定されていましたが、2011年には14,000～19,000羽、2019年には4,190羽と急激に減少しています (Jia et al.2016、Ao et al.2020)。減少の主な要因として、カリガネは草丈の低い草を好んで採食するのですが、三峡ダムによる水位管理などの影響で、カリガネの採食に適した生息地が減少していることが指摘されています。

<危機的状況にある東アジアのカリガネ>

上述の通り、中国では大幅に減少しているカリガネですが、このような危機的な状況の中、日本のカリガネが増えている理由はわかっていません。一部の個体が中国から日本に渡りルートを変えたのか、それとも繁殖地で何か起こっているのか？果たして…

カリガネの東側主要個体群の越冬地の中心である中国では何が起きているのでしょうか。1995年に、日本雁を保護する会・雁の里親友の会は、カリガネの主要な越冬地となっている東洞庭湖の北西角にある大沙湖で、11,500羽をカウントしました。2004年の調査でも12,500羽が記録され、個体数はほぼ横ばいでした。ところが、中国科学院を中心に実施された2019年の調査では4,190羽しか確認できませんでした。これは、カリガネの数の減少に加え、他へ分散したために全容が把握しにくくなっている可能性が考えられます。三峡ダム建設の影響により、カリガネにとって好適な環境の分布が変化したためと考えられます。

また、中国の越冬地で問題になっているのが、違法な狩猟と密猟 (写真1) です。カリガネは国家第2級の保護鳥に指定されているものの、マガンとの混獲が絶えません。トウモロコシや小麦に毒を含ませ、それを採食地に撒いて 飛べなくなったところを生け捕りにするという方法が現在でも行われていて、国家級保護区の限られた

人員でそうした不正行為を取り締まるのが困難な状況のようです。一方、中国科学院を中心とした若い研究者らが、カリガネの採餌内容、環境、渡り、エネルギー収支などの研究を精力的に行っており、これらの研究をもとにしたカリガネとその生息地の保護が進むことが期待されます。



写真1. 中国の市場で売られていたカリガネ

<カリガネ保護に向けた国際的な研究者ネットワーク>

このような状況の中、カリガネの保護に向け国際協力も進んできています。2019年11月には、ルーマニアでAEWAカリガネ国際作業部会の第4回会議 (写真2) が開催され、池内、澤が参加してきました。AEWAとは、Agreement on the Conservation of African-Eurasian Migratory Waterbirdsの略で、アフリカ・ヨーロッパの地域を渡る水鳥の保全のための枠組みです。移動性野生動物種の保全に関する条約 (通称: ボン条約、Convention on Migratory Species: CMS) の下に作られています。名前の通り、ヨーロッパ、アフリカ地域の渡り鳥保護の枠組みですので、これまではスカンジナビア個体群、西側主要個体群が対象にされてきました。しかし第3回会議において、今後カリガネについては地域を分けずに扱うという基本姿勢が確認されたため、日本及び中国からも研究者が参加することとなったのです。主な議題は、2016-2019年の作業計画の進捗確認に加え、2020-2023年の新たな作業計画を策定することでした。日本で「増えている」現状を報告するとともに、日本の個体群の調査の重要性について熱弁をふるってきました。



写真2. カリガネの国際会議で報告する筆者

スカンジナビア個体群、西側主要個体群については、渡りのルートが衛星追跡により明らかになりつつあり、主要なルート上での国際協力がAEWAの作業部会を中心に進められています。カリガネの大きな脅威として、狩猟圧や生息地の劣化が挙げられていました。それに対する教育・啓発キャンペーンなども様々な取り組みがなされてきました。

東側主要個体群については先に述べた通り、最も大きな越冬地である東洞庭湖では、植生の変化によりカリガネの生息適地が失われ、個体数が減少していること、広大な範囲のため十分な調査が行われていないことなどが報告されました。また発信器による追跡により、ロシアのコリマ川河口周辺の個体群が中国の長江周辺に渡っていることが明らかになってきました。そのうちの一部は、秋にサハリン、サロベツを通して、再び大陸の方に渡っていることも分かってきました。

日本からの発表では、2000年代から個体数が増えていること、ほとんどの個体は宮城県北部に集中していることを報告しました。また、日本の個体群の特徴として、採餌環境が挙げられます。日本のカリガネは自然採食地で採餌することはほとんどなく、主に牧草地で採餌しています。牧草地という採餌環境に加え、ラムサール条約に指定されている伊豆沼という安全なねぐらがあり、狩猟圧がない、といった条件が重なり、個体数が安定的に増えていると考えられることを報告しました。世界的にカリガネが減少している中、ほぼ唯一、日本の個体群は増加しています。個体数は300羽とまだ少ないのですが、日本の個体群の研究・保全を通して、カリガネ個体群全体の保全に貢献できることも多いと考えています。この会議で日本の個体群の現状と重要性を報告できたことは、今後の研究計画の大きな弾みとなりました。

ロシアの東部におけるカリガネの分布域は北極海にまで達し、また新たな繁殖地がチュコト半島のアナディル湾で見つかっています。今後は、こうした繁殖地におけるカリガネの動きが、主な越冬地である中国や日本の個体数の増減とどのような因果関係があるのかを念頭におきながら、中国においては東洞庭湖での調査の回数を増やし、また日本では発信器を装着して渡りのルートと正確な繁殖地の特定に努めることになりました。

また、カリガネの調査や保護活動に実績のあるヨーロッパの研究者を招き、中国ではカリガネの調査の質を向上させたり、ハンターを対象に識別力を高めるためのツールを用意し、カリガネの越冬環境改善に資する取り組みが必要であるとの認識で一致しました。日本ではガン類は狩猟鳥ではないので、カリガネが誤射される恐れはありませんが、まだ飛来数もそう多くはなく、該当する地域や行政を対象に、カリガネの生息地を保全し飛来数を増やすことの意義について理解を得るための機会を設けることで同意を得ました。

ユーラシア大陸の東部でカリガネを保護するには、中継地や繁殖地であるロシアでの取り組みも平行して必要で、発信器で渡りの経路が明らかになった営巣地では、ロシアの専門家による調査を実施するという方向で、意見がまとまりました。

＜カリガネの日本初の発信器調査が始まる＞

2020年には地球環境基金の支援を受け、カリガネの普及啓発と発信器調査が始まりました。カリガネは一部の湿地でしか見られないなじみの薄い鳥です。保護の機運を高めていくためには、まずは色んな方々にカリガネのことを知ってもらうことから始めなければなりません。2020年には、現地でカリガネを識別するのに役立つ「Lesser White-fronted Goose ID Card (カリガネ識別カード)」(脚注2)を作成しました。みなさんもぜひ、フィールドでカリガネ探しに挑戦してみてください。カリガネの分布や渡りはまだまだ分かっていないことが多いのです。観察数が増えることにより新たな知見が得られるかもしれません。

さらに、2020年12月には山階鳥類研究所・雁の里親友の会が共同で、日本初となるカリガネの捕獲を試みました。1週間の捕獲調査では我慢の毎日が続きましたが、最終日に見事に1羽を捕獲し、発信器を装着することができました(写真3)。装着した発信器は、位置情報を携帯電話の電波網で送信するタイプです。2021年5月に日本から出ていくまでは順調に追うことができていました。夏を過ごしているロシアのツンドラ地帯は圏外のため、情報を得ることができません。今年秋の11月に無事に渡りを終えて日本に帰ってくることを願っています。カリガネの追跡は2022年まで実施する予定にしており、今後のカリガネ研究の発展に大きな期待がかかっています。



写真3. 発信器を装着したカリガネ。装着後も元気に採餌

引用文献

- Ao, P. et al. 2020. Wildfowl (Special Issue 6):206-243.
 Jia, Q. et al. 2016. Bird Conservation International 26: 397-417.

脚注1 雁の里親友の会

「日本雁を保護する会(宮城県若柳町)」の姉妹団体。日本・ロシアで行うガン類の標識調査用の首輪・足環を製作するため、資金を募る活動を1984年から実施してきた。1987年に独立した組織となり、名称を現在のものに改めた。近年はコクガンやカリガネの調査を行っている。

脚注2 カリガネ識別カード

<https://miyajimanuma.wixsite.com/anatidaetoolbox/lesserwfg>

根室「風蓮湖ステーション」

北海道2例目 ハシブトオオヨシキリ 標識放鳥の記録

根室市 青木 則 幸

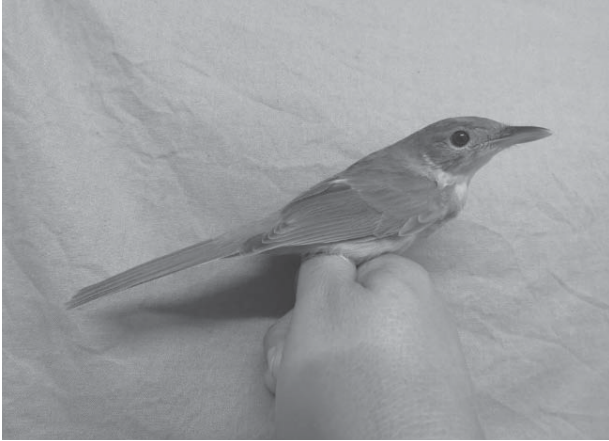


写真1.「のっぺりとした顔」が特徴の
ハシブトオオヨシキリ 2016.9.1 根室市

根室市川口、別当賀川河口にある環境省の通称「風蓮湖ステーション」は1970年代に設置された道東における鳥類標識調査の拠点です。

私はここで2012年から山階鳥類研究所の委託で繁殖期の鳥類モニタリング調査を行っています。また2014年からは繁殖期モニタリング調査終了後、ノゴマとセンニュウ類を主な対象とした標識調査を始めました。繁殖期と秋期のモニタリング調査は厳密なルールの下に行わなければなりません、これは個人調査なので日程・時刻など自由にできるのが楽なところです。

2004年5月にロシアのハンカ湖畔に行った際、録音機を持ってぶらついていたら、聴き慣れない囀りが人家の植え込みから聞こえてきました。姿が見つけれなかったので取りあえず録音し、ロシアの研究者に聴いてもらったところ、ハシブトオオヨシキリだということでした。そんなこともあって、「のっぺりとした顔の大型の小鳥」ハシブトオオヨシキリをいつかは見たいと思うようになりました。

2016年9月1日、その日の朝5時に知人3人が風蓮湖ステーションに調査の見学に来るようになっていました。朝4時に一人でかすみ網を開け、その後予定どおり合流。4人で鳥を回収に行きました（多くの場合、標識調査では許可を得てかすみ網を張り、これに掛かる鳥を1時間ごとに回収していきます）。

先頭を歩いていた私はまず網に掛かっていたシマセンニュウを網からはずしていました。その私を追い抜いた知人の一人が「モズ？モズ？」とつぶやいています。そして網からはずした鳥を識別できなかった（モズではなかった）と見えて、「これなんですかあ」と尋ねてきま

した。すると、それはまさに「のっぺりとした顔の大型の小鳥」ハシブトオオヨシキリ（写真1）ではないですか。「それハシブトオオヨシキリなので絶対逃がさないで下さい」と言って調査を続行しましたが、ステーションに戻るまでが随分長く感じられました。

ステーションに戻ってから計測、写真撮影後、放鳥（写真2）。しかし、3人は根室に着いてすぐにこんなラッキーにあたるなんて（なんと罰当たりな）!!

ハシブトオオヨシキリの大きさはオオヨシキリ大の大型ヨシキリ類ですが、眉斑と過眼線がないため顔がのっぺりしているように見える点、腰、上尾筒、尾がやや赤褐色味を帯びている点などから類似のオオヨシキリと識別できます。繁殖地は東シベリア南部から沿海地方に至るまでのロシアおよび中国北東部となっています。



写真2. 腰、上尾筒、尾がやや赤褐色味を帯びている

日本では1927年に長野で初記録され、1997年2～4月に静岡県富士市で観察・標識放鳥され、1998年10月には道南の七飯町でも標識放鳥されました（日本産鳥類記録委員会 2005）。それ以降は、舩倉島や九州で希に観察例があるだけの迷鳥です。

今回の記録は北海道2例目であると思われます。そういえば、捕獲した2016年9月1日に先立つ8月後半は、3つの台風が連続して道東を直撃して災害を引き起こしました。この時のハシブトオオヨシキリの飛来は、こうした気象状況と関連があるのかもしれませんが。

参考文献

日本産鳥類記録委員会 (2005) 日本産鳥類記録リスト(5)
日本鳥学会誌 54:60-66.

2022年に設立20周年

ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 活動は地域に根ざして

ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 獣医師 山田 智^{のり}子^こ

<2002年に環境省と苫小牧市の共同運営で発足>

北海道南西部、苫小牧市東部郊外に位置するウトナイ湖は、周囲約9km、面積約275ha、平均水深は約60cmとたいへん浅い湖で、国内有数の渡り鳥の越冬地・中継地としても知られ、毎年多くのマガン・ヒシクイ・オオハクチョウなどが飛来します。

ウトナイ湖やその周辺の自然環境の保全は早くから重要視され、1982年(昭和57年)に国指定鳥獣保護区(特別保護区)に指定され、1991年(平成3年)に国内で4番目にラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)に登録されました。この国指定ウトナイ湖鳥獣保護区が将来にわたり鳥獣の良好な生息地として保全され、また人と野生生物との共生が図れるよう、環境省の「野生鳥獣との共生環境整備事業」の国内第1号として、2002年(平成14年)にウトナイ湖野生鳥獣保護センター(写真1)が設立されたのです。

当センターは、ビジターセンター的機能を有し、ウトナイ湖の生態系や渡り鳥などの営みの解説や、自然や野生鳥獣との適正なふれあいを図る普及啓発を行うと共に、傷病鳥獣救護の受け入れやリハビリ等も行っており、環境省北海道地方環境事務所と苫小牧市による共同運営を行っています。



写真1. ウトナイ湖野生鳥獣保護センター

半数あまりは、治療・回復後に野生復帰(リリース)に至っていますが、残りの個体は死亡もしくは後遺症のため終生飼養となっています。

また、当センターは苫小牧市内で発生した事例のみの受け入れとなっていますが、国指定鳥獣保護区内での発生した事例、もしくは希少種については環境省の依頼により、市外からも受け入れをしています。(道内での傷病鳥獣の事例に関しては、発生した場所の自治体、管轄の振興局が対応しています)。

<釣り針・釣り糸被害のオオセグロカモメの事例>

2020年5月、体中に釣り糸が巻き付き、動けなくなっていたオオセグロカモメ(写真2)が保護されました。ただちに体に巻き付いている釣り糸を除去しましたが、数カ所は釣り糸の体への食い込みが強く、一部は化膿していたため、消毒および投薬処置を行い、その後無事にリリースとなりました。

このような釣り針・釣り糸によって被害に遭う野鳥は後を絶ちません。この時は発見が早く釣り針の誤飲もなかったことから命に別状はありませんでしたが、誤飲により体内で針が刺さってしまったり、体中に釣り糸が巻き付き身動きがとれずに衰弱し、命を落とすケースもあり深刻な問題となっています。



写真2. 治療中のオオセグロカモメ

<これまでに2700個体195種の傷病鳥獣の受け入れ>

当センターには年間、約100個体前後の傷病鳥獣が搬入されます。2002年に開館して以来、これまで2700個体195種の受け入れを行ってきました(2021年7月現在)。その内訳は鳥類が多く、全体の98~99%を占め、残りの1~2%は哺乳類となっております。

傷病鳥獣が搬入される原因として最も多いのは建物の壁、窓ガラス、電線や自動車などの人工物への衝突事故で、全体の60%以上を占めます。他の原因としては、他動物からの襲撃や誤認保護、釣り針・釣り糸の誤飲事故、網の絡まり、建物への迷入、粘着剤の付着、いたづらによる投石などがありました。搬入された傷病鳥獣の

<交通事故のトビの治療とリハビリの事例>

2020年7月、走行中の自動車に衝突し、飛べずにいたトビが保護されました。レントゲン検査にて、右翼の上腕骨に骨折を認めるも、骨折部位に大きなズレがないことから、運動制限をしながら経過観察としました。容体は安定しており、骨折部位も順調に回復。保護から約1ヵ月後に屋外リハビリケージ(写真3)にて飛翔訓練を始めました。リハビリの経過も順調で、保護から約2ヵ月後に無事にリリースとなりました。

トビは交通事故に遭うケースが多く、当センターの記録ではその70%以上が交通事故(疑いも含む)によるものでした。トビは一般的に、動物の死骸を食すため、轢

死した小動物を発見しやすい車通りの多い道路近辺に
ることが、事故につながりやすいと考えられます。



写真3. リハビリケージで飛行訓練中のトビ

<衰弱して保護されたモモジロコウモリの事例>

2019年11月、モモジロコウモリ(写真4)が商店街に
ある建物の階段で保護されました。明らかな外傷は認め
ませんでした。衰弱傾向にあったため、保温およびブ
ドウ糖を経口投与。しだいに体の動きも活発になり、飛
翔も確認できたことから、コウモリの活動時間帯である
夕方リリースとなりました。

当センターに搬入される哺乳類は全体の1~2%です
が、その中でも割合が多いのがコウモリの仲間です。コ
ウモリは意外と知られていませんが、身近に生息する哺
乳類です。



写真4. 保護されたモモジロコウモリ

<小学生対象の「こころの授業」など発信事業にも注力>

傷病鳥獣の救護活動は、人間社会によって傷つけられ
た野生鳥獣を人間の責任として手当てを施すことを主と
していますが、活動内容はそれだけにとどまりません。
傷病鳥獣たちが傷を負うことになった背景を調べ、人間
社会を起因とする事故が起きないように何ができるの
か、提案することも大切です。自然を保全しつつ、人も
野生鳥獣も、限られた環境の中で各々が安全に暮らすこ
とができる仕組みを築き上げるきっかけ作りのために
様々な形で発信を行っています。

毎月当センターで発行している「ウトナイ湖通信」で
は保護された傷病鳥獣の情報、毎月苫小牧民報に掲載い
ただいている連載「救護室のカルテ」では、その時々
に伝えたい救護室からのメッセージ、また年に数回、子
どもたちや地域の方々を対象にしたイベントやセミナーを
実施しています。昨年度からはSNS(当センター公式

FacebookとInstagram)の活用を行っています。そして、
発信事業の柱に2009年より取り組んでいる「こころの授
業」(写真5)があります。苫小牧市内の小学生を対象に
した出前授業で、子どもたちが暮らすこの地域で、野生
動物に起きている様々な問題が、いかに自分たちのくら
しと結びついているのかを知ってもらいます。そして、
人ごとではなく自分事として問題をとらえ、その問題解
決のために何ができるのかを考える内容となっていま
す。実際に傷病鳥を連れて子どもたちに見てもらおうこ
とを特徴としています。

今年で13年目を迎え、授業実施回数は400回、受講児童
数は12,000人を超えました(2021年7月現在)。苫小牧市
内24の全小学校で授業を実施してきました。定期的に
(毎年もしくは隔年)授業を行っているのは全体の8割
ほど。いずれは、全小学校で定期的に授業を実施し、こ
の地域に暮らす子どもたち全員に傷病鳥獣について学ぶ
機会が得られるように、周知活動にも注力したいと考え
ています。



写真5. 傷病保護のフクロウを連れて「こころの授業」

<野生鳥獣の代弁者として>

2007年、当センターで傷病鳥獣の救護をする獣医師と
して就任し、早くも15年目を迎えました。これまでたく
さんの傷病鳥獣たちと向き合ってきましたが、人間社会
が原因でケガをし、このセンターに運び込まれるのは氷
山の一角に過ぎず、計り知れないほどの多くの命が身近
な環境で被害に遭っています。

今もまさに深刻化している野生鳥獣たちの置かれた環
境。その原因が私たち人間自身にあるという事実を、そ
してその環境を改善するのも私たち人間にしかできない
ということ、傷つく野生鳥獣たちの代弁者としてこれ
からも広く伝えていきたいと考えています。

また、本年はウトナイ湖がラムサール条約に登録され
て30周年を、来年は当センターが設立20周年を迎えま
す。今後も当センターが、地域に根ざし、地球の未来の
ために貢献できるよう邁進していきたいと思っております
ので、引き続きよろしくお願いたします。



Facebook QRコード



Instagram QRコード

私の探鳥地 帯廣神社

鎮守の森と川の小宇宙 野鳥82種の記録

帯廣神社 宮司 大野 清 徳

< 1万坪の森に帯広川が隣接する豊かな自然 >

私が宮司を務める帯廣神社は、十勝地方のほぼ中央の帯広市に鎮座する神社(写真1)です。1910年(明治43年)に札幌神社(現北海道神宮)から、御分霊(神様を分けて頂くこと)をお祀り致しました。境内地は隣接する十勝護國神社と合わせて、およそ1万坪。さほど大きくはない森ですが、市街地近くにありながらも、隣接する帯広川から北東にかけては一級河川の十勝川、札内川、付随する森林域が連結し、自然豊かな環境となっています。神社の森は人々が集い、そして自然への入り口であり、まさに自然の世界と人間の世界をつなぐ森でもあります。



写真1. 帯廣神社の森と隣接する帯広川

過去にハイタカの営巣や、帯広川ではナキハクチョウの観察記録もあります。北海道野鳥観察地ガイド(大橋弘一著)に紹介された「帯広川」の中には、帯廣神社も探鳥地として含まれています。私は2016年に、境内の自然をもっと詳しく知りたいと思い、境内と帯広川の四季の変化、見られる野鳥や山野草などを素人ながら観察、記録することにしました。その観察中に境内の藪の中で偶然目の前にとまったヒヨドリ(写真2)を撮影することができ、その美しさに感動したのが野鳥観察に惹かれた第一歩でした。



写真2. 野鳥観察のきっかけとなったヒヨドリ
2016.5.27境内

日々野鳥を始め、山野草や樹木の図鑑を眺めながら、姿や鳴き声などを覚えていき、そしてその中で初めてシマエナガ(エナガの北海道亜種、写真3)の存在を知りました。本当に境内で見られるのかと不安でしたが、何とか写真に収めることができました。



写真3. シマエナガ 2021.1.13 境内

1年半の観察で、その記録は小冊子『帯廣神社七十二候』(写真4)として刊行しました。現在は帯廣神社の「エブリスの森奉賛金」500円以上をお納めの方に一部贈呈しています。



写真4. 小冊子「帯廣神社七十二候」

< 境内と帯広川で82種の野鳥記録 >

シマエナガは見つけることもそうですが、特に写真撮影は難しく、悪戦苦闘しながら撮影の魅力にも引き込まれていきました。さて、帯廣神社の野鳥は何種でしょうか。帯広百年記念館所蔵の鳥類の記録論文、元自然保護観察員の本間辰弥さんから譲り受けた帯廣神社の鳥の写真を手がかりに私が観察・撮影したもの、その他のバードウォッチャーの観察記録を含めて、これまでに82種が確認されています。しかし、環境の変化などで今は見られない種もあります。留鳥では、シジュウカラ、ゴジュ

ウカラ、ヒガラ、ハシブトガラ、アカゲラ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどは年中見ることができます。近年は当地では珍しいとされたヤマガラも住み着き、境内（もしくは付近）で毎年営巣を確認しています。夏鳥でよく見られるのは、キビタキ、センダイムシクイ、アオジ、コサメビタキなど。エゾセンニュウやエゾムシクイの鳴き声を聞くこともあります。運が良ければルリビタキや、オオルリなども。オオルリは昨年境内で幼鳥（写真5）を観察したので、近くで営巣したのかもしれない。



写真5. オオルリの幼鳥 2020.8.22 境内

神社の境内の中には人工の池があり、流れ込む水場は小鳥たちのバードバス、色々な種が水浴びしています。隣接する帯広川では、オオハクチョウやマガモ、カワアイサ、オシドリ、コガモなど。カワセミ（写真6）も観察できます。春と秋には毎年カシラダカ、当地では珍しいミヤマホオジロを観察したこともありました。



写真6. カワセミ 2019.9.22 神社裏の帯広川

帯広川下流部には冬に多くのカモ類が見られます。まれにそのオナガガモ、オジロワシ（写真7）やオオワシが境内付近までやってくることもあります。フクロウも営巣こそはしません、夏冬共に希にやってくるようです。

一度しか観察できていない種としては、いずれも境内の木にとまったヤマセミ、クマガラ、クマタカなどがいます。



写真7. オジロワシ 2020.2.4 神社裏の帯広川

今年はシマエナガの営巣記録を巣立ちまで観察することができ、現在の目標は帯広川にいるミソサザイを撮影すること。帯廣神社の神様の一柱は「スクナヒコナノカミ」といい、日本書紀において登場する際には「ミソサザイの羽をまとっていた」との記述があります。ミソサザイは4～5回程度観察はしているものの、なかなか良いタイミングで出てこず撮影ができていません。そこで、神社裏の帯広川にいるミソサザイを撮影することに注力したいと思っています。

＜シマエナガのおみくじや絵馬も人気＞

野鳥の観察記録は、帯廣神社のインスタグラムで日々紹介しています。昨年はインスタグラム展として50数点を展示しました。今後も写真が揃えば開催する予定です。

また、帯廣神社らしい取り組みとして、境内にやってくるシマエナガの絵馬、おみくじ、御朱印帳（写真8）などを授与し大変人気となっています。観察記録を始めた時に、神社で見られる野鳥や花などを図案化したおみくじなどを作りたいとも思っていましたので、良い物が出来て嬉しく思っています。



写真8. シマエナガの絵馬、おみくじ、御朱印帳

もしかすると、ミソサザイなど、また違った野鳥のお守り等が登場することがあるかもしれません。皆さんと一緒にそんな夢を膨らませながら、今後も神社の森にやってくる野鳥が増えることを願い、日々楽しみながら観察を続けていければと思っています。

野鳥 情報コーナー

野幌森林公園で 初のシロハラホオジロ

札幌市中央区 田守 真一



シロハラホオジロ 2021.5.8 野幌森林公園

2021年5月8日(土)晴れ。大沢口出発で大沢の池を經由して戻ってくるまでの間、春の息吹を感じながらの野鳥観察でした。観察場所は四季美コースを北上し大沢の池の少し手前です。昼過ぎ、散策路脇の薄暗い溝から藪にかけてホオジロらしき1羽が地面を動き回っていたので、珍しいと思い写真を撮りました。観察できたのは30秒足らず。まもなく藪に隠れてしまい、それ以後は観察できておりません。

帰宅後、写真を見るとホオジロやカシラダカに似ていましたが、頬の白い部分の様子などが違っていました。野鳥図鑑などからシロハラホオジロに似ていると思いましたが、自分自身では決められませんでした。また、それまでの野幌森林公園での観察記録からは確認できなかったのが、愛護会の何人かの方々はこの掲載写真以外の何枚かの写真も見えていただいたところ、シロハラホオジロとの結論に至りました。以下、いただいたコメントの要約です。

- ・喉が黒いという特徴があり、後方からの写真では頭中央線が鮮明。
- ・同じく後方からの写真では、背中模様がカシラダカと異なり淡い褐色。
- ・頭部の黒味が強いことから、雄成鳥とみなされる。
- ・北海道では迷鳥または数少ない旅鳥で、礼文島などの島嶼で時に観察される。内陸部での観察例は極めて少ないが、5月初旬という移動時期なので野幌森林公園に立ち寄ってもおかしくない。
- ・愛護会探鳥会50年の歴史、その間多くの会員による個人的探鳥があったにもかかわらず、野幌森林公園では初記録。

新緑の時季、新型コロナウイルス感染者数が増加傾向のため三密回避を心がけ野鳥観察を楽しむことができました。その上、珍しい観察例を会員の皆様に紹介できることをうれしく思います。観察することの大切さも学びました。

ブッポウソウを札幌市内で観察

札幌市清田区 蔵谷ひろ代



ブッポウソウ 2021.6.1 札幌市清田区・山部川

札幌市内でのブッポウソウの記録は希少と思われることから、その観察の模様を紹介します。

2021年6月1日午前8時ごろ、札幌市清田区の山部川沿いの山林でブッポウソウに出会いました。この日の朝は曇空でしたが、散策を兼ねた鳥見に出かけました。いつもの折り返し地点まで歩いていると、前方60~70m先で見慣れない鳥が羽ばたいて、近くの木に止まるのを見つけました。双眼鏡で確認すると、心の中で「ブッポウソウ！」と叫んでいました。

近づきながら2~3枚の写真を撮っていたらブッポウソウは飛び立ってしまいましたが、しばらく待つと先端が枯れた木に戻って来ました。鳩くらいの大きさです。

天気も回復し、青空を背に陽の光を浴びたブッポウソウ。赤みがかかった嘴と足、頭は黒っぽく、体は群青、紫、緑の艶のある美しい姿です。白い斑が目立つ大きな翼で飛んでは、木のてっぺんに戻って来ることを繰り返していました。飛んでいる虫を捕食していたと思われます。午前10時30分まで観察していましたが、川釣りの解禁日の釣り人もいたことから一度自宅に戻り、午後1時30分ごろに再び観察を始めました。午後3時ごろに釣り人が帰り支度で動き始めると、ブッポウソウも西の方向の森へ飛んで行き戻ってきませんでした。

【広報部から】

ブッポウソウは夏鳥として本州、四国、九州に飛来しますが、北海道では希で、主に道東や日本海側の離島などでの観察例があります。

札幌近郊では、2015年5月21日の江別市の野幌森林公園における初記録が当会会報181号に掲載されています。また、2020年5月19日の日高管内浦河町での管内初記録が201号に掲載されています。

積丹半島 キガシラセキレイの観察

酪農学園大学 小林 和楽 坂井 柊紀
千歳市 木村 耕



キガシラセキレイ 2021.5.5 積丹町美国川河口

2021年5月5日に、後志管内積丹町にてキガシラセキレイ (*Motacilla citreola*) 1羽を観察したので報告します。本個体は午前5時ごろ、美国川河口にて採餌しているのを発見しました。フライキャッチをして虫を頻りに捕食しており、周囲にはツメナガセキレイ (*M. flava*) 数羽もいました。前日およびわれわれの観察40分後に探索した人からは本個体を見ていないという情報を得たので、この日の早朝以降、繁殖地に向けて早々に飛び去ったのではないかと考えています。積丹半島では前日の夜から早朝にかけて小雨が降っており、今回のキガシラセキレイの観察もこの雨が影響していたのではないかと考えています。

キガシラセキレイは北ウラル丘陵からモンゴルで繁殖し、インドからインドシナ・中国南部で越冬します。国内では西日本で毎年のように記録されていますが、北海道での記録は非常に少なく、これまで浜中、利尻、羽幌(以上藤巻 2012)、礼文(宮本 2021)、釧路(城石一徹氏私信)、苫小牧(北海道野鳥愛護会広報部 2017)で報告されています。また、今年では4月25日にふたたび利尻で(田牧 2021)、5月18日には天売島(北海道新聞旭川・上川版 2021.6.8)でも観察されたそうです。

キガシラセキレイは2亜種、もしくは3亜種に分けられ、国内では亜種キガシラセキレイ (*M. c. citreola*) の記録がほとんどですが、亜種セグロキガシラセキレイ (*M. c. calcarata*) が羽幌で記録されています(岩澤ら 2013)。本個体は背の色が灰色であることから、亜種キガシラセキレイと考えられます。頭部がほとんど無斑の黄色であることから雄。頭部の若干の茶褐色の斑と、風切羽の大部分や雨覆の一部が幼羽と思われることから、雄の第一回夏羽と推定します。

参考文献

- 藤巻裕蔵. 2012. 北海道鳥類目録 改訂4版.
岩澤光子ら. 2013. 日本鳥学会誌62: 175-178.
北海道野鳥愛護会広報部. 2017. 野鳥だより(187): 11-12.
宮本誠一郎. 2021. 礼文島の野鳥.
田牧和弘. 2021. オロロン45(1): 7.

稚内・大沼にヘラサギ飛来

名寄市 大和田将史
網走市 工藤 茜



ヘラサギ 2021.5.13 稚内・大沼

2021年5月13日午前11時半ごろに稚内市声問村の大沼の水門近くでヘラサギを2羽観察したので報告いたします。

この日は稚内市周辺の探鳥地を巡っており、大沼にも立ち寄りました。野鳥観察館周辺でオオハクチョウと上空を通過するマガンを観察した後、声問川方面へ延びる河畔林沿いの道を車で走り野鳥を探すことにしました。手前の大沼の水門前に着くとアオサギ、ダイサギの群れがいるのを確認し双眼鏡で観察すると、その中にヘラサギが2羽紛れ込んでいるのを見つけました。1羽はヨシ原で嘴を羽に埋め休んでおり、もう1羽は水中で嘴を左右に振り回し、採餌している様子が観察できました。姿が似ているサギ類と一緒に行動し、あたかもオジロワシなどの天敵から身を守っているように私には見えませんでした。

今回観察したことをきっかけに過去の記録を調べてみました。2015年7月17日に北海道野鳥愛護会の会員によって観察されています(未発表)。また、地元紙・稚内プレスの報道によりますと、2016年5月18日に野鳥観察館常動ガイドによって確認されています。道央部などで飛来が増えている本種は道北での観察例は少ないものの、稚内の大沼はときおり見られるスポットになるのかもしれない。

道北は野鳥観察者が道央と比べ多くありませんが、ここは有名な野鳥観察スポットであり観察者も多いことがヘラサギ発見に一役買っているのではないかと考えられます。一方で、まだ記録が上がっていないだけで実際には飛来している場所が道北各所にある可能性もあります。そのため、私たちを含めたアマチュアでも日頃から観察記録や写真を残すことを意識して発信し続けることが、飛来事例の少ない野鳥の“謎”を解明していくことに繋がると考えています。



新型コロナウイルス感染症の影響で探鳥会中止の周知活動を行った幹事による状況報告と参考記録を掲載します。中止した6月5日の茨戸川緑地のお試し探鳥会はヒグマ出没の影響で立ち入れず参考記録はありません。

野幌森林公園

2021. 5. 9

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

クロツグミ、オオルリ、キビタキなどが確認できました。雨に見舞われた大沢の池ではオシドリ、キンクロハジロ以外、水鳥を確認することができませんでした。

【参考記録】 オシドリ、キンクロハジロ、キジバト、トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、アオジ 以上25種

千歳川

2021. 5. 16

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

雨交じりの肌寒い天候で、鳥はあまり見られませんでした。参考記録のチェックは第4ダムの手前までです。アオバトとツツドリを聞いたのが救いでした。

【参考記録】 キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、カワラヒワ、アオジ 以上23種

鵜川河口

2021. 5. 23

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

シギ・チドリ類では、トウネン6羽が人工干潟に飛来。海上を飛翔するチュウシャクシギの群れ20数羽も見られました。ほかにアオアシシギ、イソシギも見ることができました。草原の鳥も勢ぞろいでした。

【参考記録】 カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ウミアイサ、オオハム、シロエリオオハム、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、カッコウ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモ

メ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、ウグイス、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上32種

野幌森林公園

2021. 5. 30

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

大沢の池でカイツブリの営巣が確認できました。また、クマゲラの飛び鳴きも聞こえました。大沢園地ではオオムシクイ、桂コースでトラツグミの声が聞こえました。

【参考記録】 オシドリ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、アオバト、アオサギ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、オオムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、トラツグミ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ 以上32種

植苗ウトナイ

2021. 6. 6

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

ツツドリとカッコウの声が聞こえるのも植苗からです。ウトナイ湖畔に出たものの、水鳥の姿はなく、空を見上げても猛禽類はトビのみだったのがちょっと残念でした。

【参考記録】 ツツドリ、カッコウ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、コヨシキリ、クロツグミ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、アオジ 以上18種

厚別川

2021. 6. 13

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

カッコウは声とともに何度か飛ぶ姿も見られました。久しぶりにキジとエゾセンニュウの声を聞くことができましたが、ホオアカ、オオジュリンを確認できなかったことが気になりました。

【参考記録】 キジ、カッコウ、アリスイ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、アオジ 以上15種

野幌森林公園

2021. 6. 20

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

桂コースでは、アオバトの姿、オオルリのメスの姿を見ることができました。大沢の池ではオシドリ、カイツブリの親子、キンクロハジロのオス、アオサギなどが見られ、背後の林からトラツグミの鳴き声を聞くことができました。

【参考記録】 オシドリ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、トラツグミ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、アオジ 以上25種

福 移

2021. 6. 27

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

快晴の空を見上げれば、ヒバリの囀りとともにイワツバメが飛んでいました。ホオアカが少ない印象です。堤防からはノビタキ、オオジュリン、コヨシキリのほか、シマセンニュウの声が聞けました。チュウヒも横切りました。

【参考記録】 キジバト、アオサギ、カッコウ、オオセグロカモメ、トビ、チュウヒ、アリスイ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、シマセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、ニューナイズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上27種

野幌森林公園

2021. 7. 11

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

志文別線の分岐では、シジュウカラが雛に給餌していました。大沢の池では、浮き巣で抱卵しているカイツブリや、すでに巣立った雛の潜る姿などが見られました。また、カワセミ2羽を見ることができました。

【参考記録】 オシドリ、カイツブリ、キジバト、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、アオジ 以上23種

石狩川河口

2021. 8. 22

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】

風が強く、石狩川沿いの散策路、木道などは草木が揺れ、鳥は姿を見せませんでした。海岸線は、段丘があり、風がいくらか遮られていたのが観察することができました。シギ・チドリ類ではソリハシシギ1羽とトウネン11羽を見ることができました。

【参考記録】 ウミウ、ソリハシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ショウドウツバメ、カワラヒワ、オオジュリン 以上8種

表紙の鳥

ジュウイチ



野幌森林公園でクマガエラを調査中、一緒に調査していたこの森の鳥に詳しい当会の富川徹さんが「あれ！」と言うのでその方向を見ると、横枝に何やら止まっています。レンズを向けると初めて見る鳥で、夢中でシャッターを切りました。写真などからまだ幼羽が残っているジュウイチの若鳥ではないかと分かり、また野幌森林公園では極めて希ということでした。そのあと、オオルリのオスに2度も追いかけていたことが気になるところです…。

個人的には好きなオオルリ、クロツグミに出合えるうれしい季節ですが、今回は珍しい鳥にも出合せ、撮影もできてラッキーでした。

田中 克憲 (札幌市白石区)



新型コロナウイルス感染症の状況により中止の場合があります。中止の告知は当会ホームページに前日夜までに掲載しますので、確認をお願いいたします。

【いしかり調整池】2021年10月2日(土)

※土曜日です。ご注意ください。

いしかり調整池にやってくるシギ・チドリを主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。調整池を1周して観察します。11:30ごろ鳥合わせをして解散となります。

集 合：いしかり調整池駐車場 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

【野幌森林公園】2021年10月10日(日)、11月7日(日)、12月5日(日)

紅葉の秋から冬に向かう野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツキ類などが主になりますが、ツグミやマヒワ、レンジャク類などの冬鳥が訪れる時期となり、春や夏とは違った趣があります。午前日程で行い、コースも冬コース(エゾユズリハコース～志文別線・大沢コース～桂コース)となります。12:00ごろ大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩10分

【測量山唐松平】2021年10月17日(日)

室蘭測量山直下の唐松平で、主にハイタカ、オオタカ、ノスリなどのタカ類の渡りを楽しみます。タカ類の観察は晴天が必須条件ですが、ここでは、タカ類以外の鳥も観察することができます。11:30ごろの鳥合わせの後は解散になりますが、引き続き探鳥を楽しむことも可能です。

集 合：測量山唐松平 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

JR室蘭駅からタクシー利用可能

【ウトナイ湖】2021年11月14日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に渡ったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、カモ類が見られます。渡り途中のマガンやヒシクイなども見られます。これら水鳥類の観察を主体に湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。12:00ごろネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆雨具、観察用具、筆記用具などお持ちください。

☆悪天候で中止の場合があります。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

10:00~16:00(土日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆50年誌「私たちの探鳥会」刊行が北海道新聞で報道◆



©北海道新聞社

創立50周年事業で刊行した「私たちの探鳥会 グラフと表で見る探鳥会50年の記録」が北海道新聞の取材を受け、6月26日の朝刊に掲載されました。この報道により、札幌市中央図書館から所蔵の要望があり、2冊寄贈しています。

◆2021年度 野鳥写真展 野幌でも開催◆



2021年度の野鳥写真展(15名29点)は、5月の「ほくでんギャラリー」に引き続き7月1日~31日まで、江別市の野幌森林公園自然ふれあい交流館で開催しました。

【新しく会員になられた方々】

中村俊太郎(恵庭市)

富樫 由衣(札幌市白石区)

佐々木友善(札幌市西区)

西島 一樹(宗谷管内利尻富士町)

◆事務所の移転について◆

北海道自然保護協会の移転に伴い、2021年10月18日より北海道野鳥愛護会の住所は以下となります。

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38

北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会

※未定の電話番号は12月発行の次号に掲載します。

移転後に旧番号にかけると、新番号が音声ガイドされます。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <https://aigokai.org>